

創世記14-15章 「約束に確認を与える主」

1A ロトの救出 14

1B メソポタミアの王たちの侵攻 1-12

1C カナンの王たちの反逆 1-7

2C カナンの王たちの逃亡 8-12

2B 追跡と奪還 13-16

3B 王からの祝福 17-24

1C いと高き神の祭司 17-20

2C 俗物のソドム王 21-24

2A アブラムへの報い 15

1B 約束の子 1-6

1C 主からの報い 1-4

2C 信仰による義 5-6

2B カナンの地 7-21

1C 真っ二つに切る契約 7-11

2C 四百年の奴隷 12-16

3C エジプトの川から大河ユーフラテス 17-21

本文

創世記 14 章を開いてください。私たちは、アブラムの信仰の旅を続けて見ていきます。アブラムが、エジプトから帰り、ベテルとアイの間に天幕を再び張りました。ところが、甥のロトも羊や牛を飼っていました。それで、土地が狭すぎて、別れて住もうとアブラムはロトに誘いました。ロトは、緑豊かな、ヨルダンの低地を選びます。そこにソドムがありました。

そして 14 章に入りますが、初めは無関係に見える出来事が出てきます。けれども、それは、ソドムに住むロトが、戦いに巻き込まれて連れ去られてしまうところを、アブラムが救出することにつながります。

1A ロトの救出 14

1B メソポタミアの王たちの侵攻 1-12

1C カナンの王たちの反逆 1-7

¹ さて、シニアルの王アムラフェル、エラサル王アルヨク、エラム王ケドルラオメル、ゴイムの王ティディアルの時代のことである。² これらの王たちは、ソドムの王ベラ、ゴモラの王ビルシャ、アダマの王シニアブ、ツェボイムの王シェムエベル、ベラすなわちツォアルの王と戦った。³ この五人の王たちは、シディムの谷、すなわち塩の海に結集した。

14章は、ユーフラテス川やティグリス川一帯、「メソポタミア」とも呼ばれる地域にある王、五人の紹介から始めています。シナルは、一般にはシュメールのことです。私たちは、すでにそこに人々が集まって、バベルの塔を建てたことを見ました。アブラムの出身の町ウルもそこにあります。エラムは、今のイランのペルシャの前の古代名です。これらの王たちが戦いにやってきました。そして攻撃をされたのは、死海東部一帯にいる、カナン⁴の王たち四人です。そこに、ソドムとゴモラの王が出てきます。そのメソポタミアの王たち五人が、塩の海の南、シディムの谷に結集しました。

⁴ 彼らは十二年間ケドルラオメルに仕えていたが、十三年目に背いたのである。

この戦いの背景は、エラムの王に四人の王は仕えていたけれども、十三年目に背いたとのことです。おそらく、貢物をしていただけのを止めたのでしょう。

⁵ そして十四年目に、ケドルラオメルと彼に味方する王たちがやって来て、アシュタロテ・カルナイムでレファイム人を、ハムでズジム人を、シャベ・キルヤタイムでエミム人を、⁶ セイルの山地でフリ人を打ち破り、荒野の近くのエル・パランまで進んだ。⁷ それから彼らは引き返して、エン・ミシュパテ、すなわちカデシュに至り、アマレク人の全土と、さらにハツェツオン・タマルに住んでいるアモリ人を打ち破った。

メソポタミアの王たちは、北から南下して死海の東を攻め取っていきました。レファイム人は、ガリラヤ湖東部にいた人々です。ズジム人はその南、エミム人は、死海の東、そしてセイルの山地は死海の南にあります。そしてエル・パランとは、紅海に接するところです。アカバ湾ですね。それから、北西に動いて、カデシュに行きます。後に、イスラエルの民がそこから十二人を約束の地に送り込んだところです。そこにはアマレク人たちがいました。そして、タマルは死海の南西に位置する町であり、アモリ人たちがいました。

2C カナンの王たちの逃亡 8-12

⁸ そこで、ソドムの王、ゴモラの王、アダマの王、ツェボイムの王、ベラすなわちツォアルの王は出て来て、シディムの谷で戦う備えをし、⁹ エラムの王ケドルラオメル、ゴイムの王ティデアル、シナルの王アムラフェル、エラサル¹⁰の王アルヨクと対峙した。この四人の王と、先の五人の王とであった。

次に、死海の東にいた五人の王たちの動きを、ここに書いています。シディムの谷、すなわち死海のところに戦う備えをしました。そしてここでメソポタミアの四人の王たちと対峙し、彼らを倒して、一気に南下して攻め込んでいったということです。

¹⁰ シディムの谷には瀝青の穴が多くあり、ソドムの王とゴモラの王は逃げたとき、その穴に落ちた。そして、残りの王たちは山の方に逃げた。

対峙したけれども、敗けが分かって、王たちが逃げて行った様子を描いています。ソドムとゴモラの王は、瀝青の穴に落ちて、逃げ延びました。残りの三人は山の方に逃げます。

¹¹ 四人の王たちは、ソドムとゴモラのすべての財産とすべての食糧を奪って行った。¹² また彼らは、アブラムの甥のロトとその財産も奪って行った。ロトはソドムに住んでいた。

ここです。ここからが本題になります。四人の王たちは、戦っている中で、ソドムとゴモラにある財産と食糧を奪っていったのです。そこは、豊かな町なので、略奪するものが多かったのです。しかし、そこにいたのが、ロトとその家族、また財産もあったということなのです。

ここで二つのことを教えられます。一つは、「ロトはソドムに住んでいた」と書いてあることです。13章12節、ロトがアブラムと別れて住んだ時のことを見てください。「アブラムはカナンに地に住んだ。一方、ロトは低地の町々に住み、ソドムに天幕を移した。」ソドムのほうに天幕を移ただけで、ソドムの中には住んでいませんでした。けれども、今は、ソドムの中に住んでいるのです。13節には、「ソドムの人々は邪悪で、主に対して甚だしく罪深い者たちであった」とありますから、ロトもさすがに、そこには住まないでいたのでしょう。けれども、彼が神から目を離して、ヨルダンの低地全体が、「主の園のように、またエジプトの地のように、どこもよく潤っていた(10節)」ので、そこを選びました。自分の目で見えることを、主がどう見ておられるかよりも優先する時に、私たちは、自分では大丈夫だと思っても、全然、大丈夫ではないのです。

そしてもう一つ。世にある快適さや、安全は、一気に奪い取られうるのだということです。ロトにとって、とても居心地のよい、そのヨルダン低地ですが、戦争によって一気に奪われたのです。自分の生活の安全保障を、どんなにこの世に願っていたとしても、保障されるものではないことをよく表しています。パウロは、世に安住を求めている人は、盗人のように主の日が来ることを警告しています。「Iテサ5:2-3 主の日は、盗人が夜やって来るように来ることを、あなたがた自身よく知っているからです。3 人々が「平和だ、安全だ」と言っているとき、妊婦に産みの苦しみが臨むように、突然の破滅が彼らを襲います。それを逃れることは決してできません。」

2B 追跡と奪還 13-16

¹³ 一人の逃亡者が、ヘブル人アブラムのところに来て、そのことを告げた。アブラムは、アモリ人マムレの榿の木のところに住んでいた。マムレはエシュコルとアネルの兄弟で、彼らはアブラムと盟約を結んでいた。

アブラムが、今、ヘブロンにいることを思い出してください。ロトと別れた後に、主は、北を、南を、東を、西を見渡しなさい、これらはすべて、あなたの子孫に永久に与えると約束されました。そして、この地を縦と横に歩き回りなさいとまで言われました。それで、彼はベテルとアイの間にいたところから南に下り、ヘブロンにある、マムレの榿の木のそばに来て住んだのです。

マムレは、現地のカナン人でした、けれども、兄弟エシュコまたアネルと並んで、盟約を結びました。カナン人だからと言って、自動的に全ての人が呪われているわけではありません。むしろ、アブラムを祝福する者は、祝福されます。

¹⁴ アブラムは、自分の親類の者が捕虜になったことを聞き、彼の家で生まれて訓練された者三百十八人を引き連れて、ダンまで追跡した。

アブラムの、甥ロトに対する思い、その愛は熱いものでした。自分の息子のようにみなしていたことでしょう。それは後に、ソドムを滅ぼすことを宣言された主に対して、ソドムの町をロトのゆえに滅ぼさないでくださいと執り成す祈りにも表れています。そして主は、アブラハムのゆえに、ロトとその家族を救うべく、御使いを遣わされています。

アブラムは、しっかりとした族長になっていました。つまり、彼の家は、すでに一つの族として、いろいろな機能を備えてみました。その一つが、自衛のために訓練された者がすでに三百十八人いたことです。

そして、驚くことに、メソポタミアの王たちが、イスラエルの最北の町ダンまで北上したことを聞いたのでしょ、そこに敏速に追いつくことができました。今、テル・ダンと呼ばれる遺跡があります。イエス様が、ご自分が神の御子キリストであるというペテロの告白を受けた、ピリポ・カイサリアのすぐそばにあります。テル・ダンに、カナン時代の門の遺跡が残っています。アブラムは明らかに、その門を通る、少なくとも見たことでしょう。

¹⁵ 夜、アブラムとそのしもべたちは分かれて彼らを攻め、彼らを打ち破り、ダマスコの北にあるホバまで追跡した。¹⁶ そして、アブラムはすべての財産を取り戻し、親類のロトとその財産、それに女たちやほかの人々も取り戻した。

ダンで打ち破った彼らは、なんと彼らをさらに攻めていきました。ダマスコまでは50^キぐらいの距離です。さらにその北にまで追跡して、それについて、ロトとその親戚、また財産、女たちや他の人々も奪還できました！けれども、これは、実は主ご自身が戦ってくださり、打ち勝たせてくださったことが、次の出来事で分かります。

3B 王からの祝福 17-24

1C いと高き神の祭司 17-20

¹⁷ アブラムが、ケドルラオメルと彼に味方する王たちを打ち破って戻って来たとき、ソドムの王は、シャベの谷すなわち王の谷まで、彼を迎えに出て来た。¹⁸ また、サレムの王メルキゼデクは、パンとぶどう酒を持って来た。彼はいと高き神の祭司であった。

先週の午前礼拝で学んだところです。シャベの谷、王の谷は、ケデロン谷の一部です。神殿の丘、モリヤ山とオリーブ山の間を走っているケデロン谷です。そこに、二人の王が来ました。一人はソドムの王です。しかし、その地元の王も来たのです。それが、メルキゼデクです。

メルキゼデクは、サレムの王ですが、サレムは、エルサレムのことです。今年5月のイスラエル旅行で、ダビデの町、すなわちエルサレムの遺跡で、当時、偶像礼拝ではない、祭儀の跡が発掘されたところを見ました。同じような時期、紀元前2000年辺りです。もしかしたら、メルキゼデクも、その祭儀の場所を使っていたかもしれません。

先週の午前礼拝のメッセージを、ぜひ思い出してください。サレムは平和という意味、メルキゼデクは義の王という意味です。義なる王、平和の王です。義なる方が、どうやって罪ある私たちに平和を持つことができるのか？それが、恵みによってです。受けるに値しない祝福を、恵みによってお与えになり、神の平和が与えられます。

そして、彼は、いと高き神の祭司なのです。神と人とを仲介する存在であり、その象徴が、彼が携えてきた、パンとぶどう酒に表れています。イエスご自身が、ユダヤ人たちに、アブラハムは自分の日を見て、喜んだと言われました。そうです。パンを裂きなさい、これはわたしのからだですと言われました。そして、ぶどう酒については、新しい契約のために流される、わたしの血であると話されました。義なる神が、この方を罪の身代わりとしてくださいました。私たちの罪ゆえに、そのからだにむち打たれ、血を流されました。そのことで、私たちは神の平和を受け取るのです。

¹⁹ 彼はアブラムを祝福して言った。「アブラムに祝福あれ。いと高き神、天と地を造られた方より。
²⁰いと高き神に誉れあれ。あなたの敵をあなたの手へ渡された方に。」アブラムはすべての物の十分の一を彼に与えた。

メルキゼデクは、祭司がするように彼を祝福しました。いと高き神からの祝福です。天と地を造られた方からの祝福です。天地を創造した神にとって、世の王たちは、地のほこりにしか過ぎないような存在です。私たちが、天からの祝福を求めるとか、それとも世の富を求めるとか？ということですね。そして、ここで、敵をアブラムの手へ渡したのは、神ご自身なのだということが分かります。

大事なことは、アブラムが、すべての十分の一を献げたということです。大きな戦いの後に、自分が勝利したのですから、分け前をもらうのが、世の常です。ところが、彼はそういったものよりも、神ご自身の祝福に満たされています。それで、今、持っているものの中から十分の一を献げました。この、神への感謝の応答が、私たちの献金の基です。霊的な祝福は、与えれば、与えられるという循環の中にあります。自分が主に仕えれば、それだけ自分は受け取ることができます。

2C 俗物のソドム王 21-24

²¹ソドムの王はアブラムに言った。「人々は私に返し、財産はあなたが取ってください。」²²アブラムはソドムの王に言った。「私は、いと高き神、天と地を造られた方、主に誓う。²³糸一本、履き物のひも一本さえ、私はあなたの所有物から何一つ取らない。それは、『アブラムを富ませたのは、この私だ』とあなたが言わないようにするためだ。²⁴ただ、若い者たちが食べた物と、私と一緒に行動した人たちの取り分は別だ。アネルとエシュコルとマムレには、彼らの取り分を取らせるように。」

ソドムの王は、当時の戦争でそうであったように、自分たちを救った、戦いに勝った王に対して、分け前を与えようとしています。けれども、アブラムはきっぱりと断りました。これは、いと高き神が、勝たせてくださったものです。主ご自身の戦いであり、自分自身は主に十分の一を献げました。ですから、こうした世の分け前は要らないと言いました。特に、ソドムの王は、いわゆる俗物です。主が祝福されて富んでいくところを、ソドムの王が、自分が富ませたのだと言いかねません。

主にあって行ったことを、世の人が報酬を与えようとしてそれを拒んだ人はいますね。ダニエルです。バビロンの最後の王、ベルシャツアル王が、王宮の塗り壁に現れた人の指が、書き記した文字を解き明かすのに、褒美を与えるとしました。ダニエルが現れたので与えると言いましたが、「贈り物は自分で取っておき、報酬はほかの人にお与えください。(ダニエル 5:17)」と言って、断りました。サマリアでも、シモンが、聖霊の賜物を授ける力を、ペテロから金で買おうとしましたね。ペテロは、「おまえの金は、おまえとともに滅びるがよい。おまえが金で神の賜物を手に入れようと思っているからだ。(使徒 8:20)」と言いました。

私も、自分の福音の働きをしている中で、何度かありました。ここの集まりに来てくれるなら、いくらで給料を払うからという話です。すべて断りました。結婚式では、クリスチャンではない方から、他の人を招かずに二人だけというお願いも、お金をもらっても司式はしなくないですから、断りました。主のお働きを、お金でやり取りしようというのは、クリスチャンからでも、クリスチャンでない方からでも、異質であると思います。

けれども、アブラムは、常識はわかまえています。共に戦ってくれた、アネル、エシュコル、マムレは、いと高き神を信じて共に戦ったのではありません。常識の範囲で、取り分を取らせるようにと言っています。信じていない人に、信仰から出ている行動を、巻き込ませてはいけませんね。

2A アブラムへの報い 15

このようにして主は、いと高き神の祭司として、キリストを現すメルキゼデクを彼に現してくださいました。けれども、アブラムは一人の人間です。生身の体のある人間です。次の章は、そうした彼が、神に正直に申し上げることを見ていきます。そして、神ご自身が彼に約束の確認をしていかれるところを見ます。そのやり取りから、主を信じるということがどういうものかを、よりよく知っていけるのではないかと思います。

1B 約束の子 1-6

1C 主からの報い 1-4

¹ これらの出来事後、主のことばが幻のうちにアブラムに臨んだ。「アブラムよ、恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたへの報いは非常に大きい。」

アブラムは、メルキゼデクから始まり、主ご自身の直接の現れを受けています。今は、幻のうちに、主のことばが彼に臨んでいます。

それが、「恐れるな」であります。そういわれているのですから、恐れているのです。ここで、大勝利を収めました。戦いによって大きな心的な衝撃を受けているはず。もしかしたら、メソポタミアの王たちの味方が、自分を襲ってくるかもしれないと恐れていたかもしれません。しかし、恐れるなと語ってくださっています。

そして、「わたしはあなたの盾である。」と言われていました。何か盾になるものを与えるのではなく、主ご自身が盾となってくださいます。自分が、何かを欲しいと願っている時に、私たちは何も与えられないことがあります。けれども、実は、すべてが与えられているのです。それは、主ご自身がともにおられることです。主は、後にモーセに、「わたしは、『わたしはある』というものだ」と言われました。主が、すべての必要になってくださるのです。

さらに、主は、「あなたへの報いは非常に大きい」と言われます。ソドムの王からの取り分を、彼は受け取りませんでした。しかし、それによって生じた損は、補って有り余るほどになると約束してくださいました。私たちは、この約束を信じないといけません。主は、弟子たちを慰めましたね。「マタ 19:29 また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子ども、畑を捨てた者はみな、その百倍を受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。」

² アブラムは言った。「神、主よ、あなたは私に何を下さるのですか。私は子がないままで死のうとしています。私の家の相続人は、ダマスコのエリエゼルなのではないでしょうか。」³ さらに、アブラムは言った。「ご覧ください。あなたが子孫を私に下さらなかったのも、私の家のしもべが私の跡取りになるでしょう。」

アブラムは、報いが大きいと主が言われるので、正直な思いを訴えたのです。それは、子がないのです。サライは不妊です。自分はもう老齢です。サライもかなりの年よりです。これまで、大いなる国民となるか、子孫にこの地を与えよとか、子孫は地のちりのようになるか、いろいろ大きな約束をくださっているけれども、子どもが一人も生まれていないではないか？という訴えです。

おそらく、2節でこの訴えをした後で、しばらく沈黙が続いたのかもしれませんが。それで3節で、自分の家のしもべ、ダマスコのエリエゼルが自分の跡取りになるということですね？と語っています。

私たちも、こんな葛藤を抱かないでしょうか？主に約束されているけれども、そんな大きなことを言われても、肝心の目の前のことでさえ解決していないという思いです。主の約束と、目の前のギャップがあまりにも大きいのです。

⁴ すると見よ、主のことばが彼に臨んだ。「その者があなたの跡を継いではならない。ただ、あなた自身から生まれ出てくる者が、あなたの跡を継がなければならない。」

主は間違いなく、ご自身の約束を実現されることをアブラムに確約されています。家のしもべとか、そういった中途半端なものではなく、確かにアブラム自身から出てくるのが、約束の子だということです。こちらで、人間側で実現可能なように、神の約束を修正する必要はないのです。

キリスト教会が、主の約束を、人間側で実現可能なように解釈を変えることがあります。かつて日本は、戦時中、キリストが王として再臨されることについて、裁判所で問い詰められて、「それは、心に王として来られるということで、文字通りではない」と答えています。すべての目が、この方を見て、稲妻が東から出て西にひらめくのと同じようにして実現すると、はっきりと言われたのに、こんなことを言うのです。主の言われていることは、こちらで調整や修正をする必要はないのです。

2C 信仰による義 5-6

⁵ そして主は、彼を外に連れ出して言われた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。」さらに言われた。「あなたの子孫は、このようになる。」⁶ アブラムは主を信じた。それで、それが彼の義と認められた。

主は、自分から出てくる子が、数多くなることを、星の数のようになることを示されて、教えられました。事実、イスラエルの民は、エジプトから出てきて、荒野の旅を経た後、モーセがこのように言っています。「申 1:10 あなたがたの神、【主】があなたがたを増やされたので、見よ、あなたがたは今日、空の星のように多い。」

そして、アブラムは、ここで主を信じています。ここが大事ですね。彼の信仰は、全く問題なく信じられたというものではありません。疑いがある中で、それでも、主がそう言われているのですから、分かりましたというような、従順にともなう信じ方です。ペテロが、召命を受ける時に、舟で、「網を降ろしなさい」と主に言われて、「一晩中、漁をしたけれども、一匹もとれなかった」といいましたが、それも、「ルカ 5:5 おことばですので、網を下ろしてみましよう。」と言ったのです。疑いが出てきたとしても、それであっても、「はい、あなたのおことばですから、受け入れます」とするのが信仰です。

そして、「それが彼の義と認められた」とあります、今日の午前礼拝の内容です。大事なものは、13章からの続きです。メルキゼデクは、義の王です。彼から、神の祭司として祝福を受けました。それが、神ご自身の義を、恵みの賜物として受け取ったのです。彼自身が正しいとか、正しくないとか

かいうものではありません。神がご自身の義によって、彼を守ってくださるといいでしょう。自分は正しくないのに、正しい方がついていてくださるということです。そして、自分ではなく、神ご自身が、ご自身の正しさを自分を通して行ってくださるということです。これが、信仰による義です。

そこで、神に信頼する必要があります。自分は正しくないのですが、正しい方に信頼して、お任せし、聞き従うのです。その信頼するという関係こそが、神の義が現れる条件となるので、それで信仰が義とみなされるのです。

2B カナンの地 7-21

1C 真っ二つに切る契約 7-11

⁷ 主は彼に言われた。「わたしは、この地をあなたの所有としてあなたに与えるために、カルデア人のウルからあなたを導き出した主である。」⁸ アブラムは言った。「神、主よ。私がそれを所有することが、何によって分かるでしょうか。」

次に、主が約束されていたのは、カナンの地を所有するということです。カルデア人の地から、アブラムを導き出したことを思い出させていますが、その時から、カナンの地をあなたに与えると言われていました。シェケムにアブラムが到着した時に、子孫に与えると言われていました。だから、アブラムは、所有する兆しもないので、「私がそれを所有することが、何によって分かるでしょうか」と問いかけています。同じように、正直な疑いを主ご自身にぶつけているのです。

⁹ すると主は彼に言われた。「わたしのところに、三歳の雌牛と、三歳の雌やぎと、三歳の雄羊と、山鳩と、鳩のひなを持って来なさい。」¹⁰ 彼はそれらすべてを持って来て、真っ二つに切り裂き、その半分を互いに向かい合わせにした。ただし、鳥は切り裂かなかった。¹¹ 猛禽がそれらの死体の上に降りて来た。アブラムはそれらを追い払った。

これは、私たちにはとても、不思議で、変な儀式のように見えるでしょう。当時、ヒッタイト人や、アラム人など、その地域の人々が、契約を結ぶために行ったことでした。18 節「主はアブラムと契約を結んで」とありますが、契約のヘブル語「ベリート」は、「切る」という意味の「バラ」から来しているのではないかとされています。アッカド語にも、「間」という意味合いのある言葉があり、当時、いけにえの牛や羊が、真っ二つに切られて、その間を通るといのは、だれの目にも、契約を結んでいるということが分かるような行為です。それだけ、契約が確かなものであり、もし違反しようものなら、このいけにえのように、真っ二つに切られるのだということです。

鳥は、切り裂かれませんでした。これは、これからのいけにえでも同じで、牛や羊は引き裂かれますが、鳥は行いません。おそらく、物理的に切り裂くと、ぐちゃぐちゃになってしまうからではないかと思えます。

アブラムは待っていました。主が次の指示を与えるのを待っていました。その間に猛禽が来ます。それを彼は追い払います。主はすぐに次のことばを与えなかった理由が次にあります。

2C 四百年の奴隷 12-16

¹² 日が沈みかけたころ、深い眠りがアブラムを襲った。そして、見よ、大いなる暗闇の恐怖が彼を襲った。

「日が沈みかけたころ」ということで、これを主は待っておられたのです。なぜ、そんなことを行われたのか？と言いますと、アブラムに主が、このカナン之地を与えられるのに、その前に暗黒の時代が来ることを教えるためです。大いなる暗闇の恐怖が彼を襲っています。

「深い眠り」が襲ったとありますが、幻が与えられると、聖書ではいろいろな人が眠くなることが書かれています。預言者ゼカリヤもそうですし、ペテロも、天からの敷物の幻を見た時に、眠気が襲いました。

¹³ 主はアブラムに言われた。「あなたは、このことをよく知っておきなさい。あなたの子孫は、自分たちのものでない地で寄留者となり、四百年の間、奴隷となって苦しめられる。¹⁴ しかし、彼らが奴隷として仕えるその国を、わたしはさばく。その後、彼らは多くの財産とともに、そこから出て来る。

とてつもない、大きな試練が、長い期間に渡って、イスラエルに民に襲います。それは、自分たちのものではない地で寄留者になるということです。これが、ヤコブの家族がエジプトに下った後で起こります。そして、四百年の間、奴隷として苦しめられるのです。恐ろしいですね。日本のキリシタンの歴史は、苛烈極まりないものでしたが、1612年から1873年までの257年でした。はるかに長い期間、奴隷として苦しめられ、希望に満ちたアブラハムの子孫への約束とは裏腹に、暗いものです。

しかし、主は確かに、その国、エジプトを裁かれます。ファラオに対して十の災いを与えられます。そして、多くの財産と共に出て行きますね。出エジプト記によれば主の言われるとおりになります。

¹⁵ あなた自身は、平安のうちに先祖のもとに行く。あなたは幸せな晩年を過ごして葬られる。

アブラムは、今、ヘブロンにいますが、後に、彼は、マムレに面する畑地を彼が購入しました。そこにマクペラの洞穴があります。妻サラに先立たれたからです。そして、自分自身がここに葬られます。「25:8 幸せな晩年を過ごし、年老いて満ち足り、息絶えて死んだ」とあります。

¹⁶ そして、四代目の者たちがここに帰って来る。それは、アモリ人の咎が、その時まで満ちることがないからである。」

そして、このカナン(カナン)の地については、四代目の者たちが帰ってきて、所有するのです。その理由は、アモリ人たちの咎が、まだ満ちていないからだと言われるのです。10章の学びで、カナンの子孫たちが、忌まわしいことをしていくことになる話をしました。主は、それを知らないのではないのです。しかし、主は忍耐深い方であり、彼らのご自身に立ち返るであれば、その呪いをすぐにも取り除かれることでしょう。その忍耐深さが、「その時まで(その時まで)に満ちることがない」という表現なのです。

3C エジプトの川から大河ユーフラテス 17-21

17 日が沈んで暗くなったとき、見よ、煙の立つかまどと、燃えているたいまつが、切り裂かれた物の間を通り過ぎた。

日が沈んで、すっかり暗くなりました。ところが、闇の中に輝く光があります。煙の立つかまどと、燃えているたいまつがあります。それが、なんと切り裂かれた間を通り過ぎました。これが表しているのは、主ご自身が、契約を守るという意味なのです。

ここで驚きなのは、神ご自身がアブラムに、この間を通るように言われていないことです。この契約の内容は、神ご自身だけがこれを遵守する義務が課せられています。難しい言葉で、片務契約と言います。双務契約ですと、両者が契約を遵守する義務がありますが、片務は片方だけです。主は、一方的に、ご自身にだけこの遵守の義務を課して、それで約束されるのです。

これが、神のご契約の本質であり、アブラムに対する契約がその本質を見事に表しています。主は、全能の神です。また主権者です。だから、ご自分のしたいことをいくらでもできるのです。しかし、アブラムに現れた神、天地を造られた方は、ご自身の定められた契約に縛られているのです。契約にしたがって、事を行われ、その主権を働かせるのです。

だから聖書のその後の歴史は壮大です。イスラエルの歴史全体に、この契約が働いていることを見て取ることができ、契約は、異邦人にさえ引き延ばされる姿を、新約聖書で観ることができ、今に至ります。そして、聖書のすべてが書かれた後も、そのままアブラムへの契約の姿は見る事ができ、イスラエルが生まれ、その民が離散しても生き延び、また戻ってきて、この現代にその国が建てられています。異邦の民も、イスラエルの子孫であるキリストによって、アブラハムの祝福を受け継ぐ者となっています。アブラハムの子孫であるキリストが、再び来られることによって、次に出てくる、土地所有の約束が完全に実現するのです。

18 その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。「あなたの子孫に、わたしはこの地を与える。エジプトの川から、あの大河ユーフラテス川まで。¹⁹ケニ人、ケナズ人、カデモニ人、²⁰ヒッタイト人、ペリジ人、レファイム人、²¹アモリ人、カナン人、ギルガシ人、エブス人の地を。」

主の与えられるのは、「エジプトの川から、あの大河ユーフラテス川」であります。南は、エジプト

の川です。これはナイル川ではなく、ナイル川の支流のもっとも東にある、スエズのあたりであると言われていました。あるいは、シナイ半島にワジがあるのですが、そこかもしれません。そして北はユーフラテス川です。

ヨシュアの時には、カナンを占領しましたが、割り当て地はそこまで至りません。しかし、ダビデが周囲の国々を制圧し、安息を得ました。「Ⅱサム 7:1 主は、周囲のすべての敵から彼を守り、安息を与えておられた。」そして、ソロモンの統治の時にこの地域を支配したとあります。「Ⅰ列王 4:24 これはソロモンが、あの大河の西側、ティフサフからガザまでの全土、すなわち大河の西側のすべての王たちを支配し、周辺のすべての地方に平和があったからである。」ティフサフは、ユーフラテス川の上流、大きく湾曲しているところにある町です。そこから、ガザまでですが、ガザの南に、エジプトの川があります。そこまでの西側の王たちを支配していました。ただ、これは、あくまでも支配していたのであり、所有していたわけではありません。

しかし、ダビデとソロモンに与えられた、平和と繁栄のイスラエルの幻は、将来に引き継がれません。このユーフラテスの東には、アッシリアがあり、南にはエジプトがあった時、イザヤは幻の中で、この広大な地域のすべてが、主を礼拝するところとなることを預言しています。「19:23-25 その日、エジプトからアッシリアへの大路ができ、アッシリア人はエジプトに、エジプト人はアッシリアに行き、エジプト人はアッシリア人とともに主に仕える。24 その日、イスラエルはエジプトとアッシリアと並ぶ第三のものとなり、大地の真ん中で祝福を受ける。25 万軍の【主】は祝福して言われる。「わたしの民エジプト、わたしの手で造ったアッシリア、わたしのゆずりの民イスラエルに祝福があるように。」」そして、エゼキエルの幻には、北側の境がユーフラテス川に近づいている姿を見ます。

こうやって、主はアブラムに、アダムに与えられていた世界を支配しなさいという祝福命令に沿った、子孫と土地の約束が与えられました。アブラムにとっては、子も与えられていない、土地も全く、見る影もない時に、それでも信じたのです。この約束を、イエスを信じる異邦人にも与えられているのだと言う話が、ロマ 4 章です。アブラハムの祝福を、キリストによって与えられ、世界を相続するとあるのです。神の国を相続するのです。信じられますか？そう、その信じる信仰こそが、神によって義と認められるのです。